



日本経済の父「渋沢栄一」 第五回

講師 一龍齋貞花



大河ドラマで視聴率のよい人気は戦国物。幕末物は視聴率がよくないといわれている。これまで幕末物の中に全く登場しなかった渋沢栄一。世界遺産の富岡製糸も関係がありながら登場しなかった。日本経済の父といわれる人が描かれなかったのは不思議。

大蔵大臣大久保利通は、予算編成の時、陸海軍の多額の経費を鵜のみにする予算を主張。

大蔵大丞という次官の栄一は反対。

「軍備は必要ないというのか」

「国家の軍備が必要なのは心得ています。しかし歳入が決らぬうちに多額の支出を決定するのは財政上危険の上もありません」

現在の政治はどうですか。二年連続

税収より予算の方が多い赤字予算。

多額の国債発行、これは国民からの借金。皆さんのところへも取引銀行から国債購入依頼があり、購入された方もおありと思います。しかも軍事費は、F35購入、海上イージス、オスプレイは一機一〇〇億円を、年度を分けて17機購入予定などアメリカからいわれるままに購入。勿論軍備は必要でしょうが、今一番の問題はコロナ対策。そればかりかGOTOトラベル、GOTOイートの予算が、コロナ対策費の倍以上、逆じゃないですかね。皆さんはどう思われますか。

薩摩と長州が牛耳っている政府。どちらにも縁の無い徳川の家来だった渋沢が大蔵大丞になったことさえ異例。

大久保は、次官の意見など相手にし

ない。

それならばと四年後の明治六年、栄一は厭気がさし辞任。

望み通り役人をやめ、民間の事業を盛んにしようと決心し、事業経営には人の道を守ることが大切と、少年時代から愛読している論語を道しるべとした。栄一の「論語とソロバン」という本を、根尾がドラゴンズ入りの時持参したので話題になり、この本が随分売れたといえます。根尾もそろそろ出てきてほしいものです。

判り易くいいますと、間違ったこととして利益を上げてはいけません。商売にも道徳が大切、国民生活向上のためにも守らなければいけません。

「金儲けのために手段を選ばないというのはいけません」というのが栄一の信念でした。

第一国立銀行創立

資本家三井組と小野組を説得して株主とし、ほかに一般の投資をつのつて第一国立銀行を創立。当時銀行という言葉さえなく、株式募集の広告も判り易く書きます。

「そもそも銀行は、大きな川のようなものだ。役に立つことは限らない。しかしまだ銀行に集まってこないうちの金は、溝にたまっていく水や、ぼたぼた垂れているしずくと変りがない。

時には豪商、豪農の蔵の中に隠れていたり、日雇い人夫やお婆さんの懐にひそんでいたりする。それでは人の役に立ち、国を富ませることは出来ない。ところが銀行を作ったその流れ、道を

開くと蔵や懐にあった金が集い、大變多額の資金となるから貿易も繁盛するし、産物も増えるし、工業も発達するし、学問も進歩する。道路も改良されるなどすべて国の状態が生れ変わったようになる」

フランスで学んだ合本主義から、判り易く一般に説明。こうして第一国立銀行が設立され、日本橋海運橋に当時珍しい洋風五階建ての大建築が建てられ、栄一が頭取に就任。

新一万円札の肖像にふさわしい人で、ところが設立早々に崩壊の危機にさらされてしまった。

明治七年十一月、政府は突然の方針転換で、小野組に預けていた五〇〇万円、今の約五〇〇億円を返還せよと命じたため小野組は倒産の危機におちいった。大口融資先の小野組が破産すれば回収不能となり、国立銀行も崩壊してしまう。なんとしても連鎖倒産は避けなければいけない。小野組に罪は無いものかどうか。

思い余った栄一は、小野組の経営責任者古河市兵衛に直談判。

「日本を救うと思つて一肌脱いでもらう訳にはいかないだろうか」

すると古河は、懐から一枚の書付けを取り出し、小野組の資産に加え、古河個人の資産が書かれていた。

「生れたばかりの銀行をつぶし、日本の将来を台無しにしてはいけない。そのためには自分は無一文になつてもよい」という古河。

「古河さん、有難う、すまん」

男泣きに泣く洪沢。

こうして危機は脱したものの、さらに一年後銀行の金庫から毎日金貨が流出し、間もなく金庫は空になつてしまふ。銀行が発行する紙幣は、いつでも同じ価値で金と交換するという条例に目をつけた外国商人が、自分の国の通貨を円に替え、為替市場が未整備だった当時は、外国より安く金を買うことが出来ると、海外よりはるかに安い価値で金と交換したため、金の蓄えはたちまち底をつき、新たな紙幣の発行を取り止めざるを得なくなつてしまつた。今度こそ銀行はつぶれてしまふ。

銀行券と金との交換は、当時の先進国では正しいやり方で理想論としてはよかつたものの、まだ歩き始めたばかりで対応が十分でなかつたのです。

政府は、かつての武士である士族に、毎年秩禄という一種の年金を払つていた。版籍奉還により武士は俸禄が貰えなくなつてしまつた。それに対する年金で、国家財政の30%にも達し財政破綻の一因となつていた。

そこでその秩禄を廃止して、代わりに数年分を一括にした額の債権を発行し、その利息を支払うという政策が実行されようとしていた。

栄一は、その債権に目をつけ、

「債権を元に、銀行を設立出来るように条例を改正すれば、各地に銀行が出来て日本経済が活性化するに違いありません」

と、政府に働きかけたものの政府の高官たちはかつての仲間の士族を思い猛反対。

「銀行がつぶれてしまつては、日本の将来の経済のためにも決してよくありません」

と、大蔵大臣大隈重信を説得。

「判つた」と、しぶしぶ承諾してくれただので、明治九年国立銀行条例が改正され、目論見通り銀行設立ブームが起き、士族たちは各地の仲間を募つて

債権を集め、それを資金として銀行を設立、設立順に番号をつけ東京、横浜、新潟、大阪にしかなくつた銀行が、岩代福島第六銀行、土佐高知第七、三河豊橋に第八国立銀行と、その後三年間に一五三の銀行が設立されていき、栄一は行員のために何度も講習会を開き、

「これだけは忘れないで頂きたい。銀行は産業を興すのを助けなければいけません。それが銀行の本分です」と講義。

こうして各地に出来た銀行の働きによつて、各地に鉄道が敷かれ地場産業を起す原動力となり、日本経済の礎が築かれたのでございました。

実業とか実業界という言葉が出来たのもその後です。

函館で降伏し監獄につながれていた従兄弟の洪沢喜作が釈放されるや大蔵省の下役に迎え、全国の養蚕の育成に当らせ、政府が上州富岡にフランス人の指導で洋式の製糸工場を建設。養蚕の経験のある栄一が中心になつて、現在世界遺産富岡製糸に発展させました。

洪沢の社会事業、そして三菱岩崎弥太郎との壮烈な商業戦争は次回のお楽しみに。